

広報福島

発行 福島地区小学校長会
責任者 会長 小川 尚子
編集 同 広 報 部



【巻 頭 言】

「授業観」「教師観」のアップデートを

福島市立飯坂小学校長 小川 尚子

5月23日、東京都のニッショーホールにおいて全国連合小学校長会研修会が開催され、文部科学省初等中等教育局教育課程課長 武藤久慶氏より「次期学習指導要領の背景と検討の方向性」について講話をいただく機会を得た。その中で、現行の教育課程における学習内容は、質・量ともに過剰となっており、児童や教員に過度な負担がかかっているという「カリキュラム・オーバーロード」の解消に向けて検討されていることについて話があった。これは、令和6年12月25日に、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」中央教育審議会に諮問を行った内容に基づいており、諮問文に記載の「教科書の内容が充実し、分量が増加した一方、網羅的に指導すべきとの考えが根強く存在し、負担や負担感を生んでいる…」を出所としている。

まだ、私が若かりし頃、「教科書を教える」のか「教科書で教える」のか諸先輩方からご指導いただいたことがあった。教科書は、学習指導要領に基づいて作成されていることから、先生方は、未履修がないよう、余すことなくしっかりと「教科書を教える」授業を行っているかと推察できる。オーバーロードと言われる教科書の内容を全て指導しようとする、教師は話してばかり、児童は板書を写してばかりの一斉教授的な授業となるのは明らかである。教科書は、学習指導要領に示された各教科の内容を指導するための「主たる教材」であり、学校現場に課せられているのは、「教科書を教える」ことではなく、学習指導要領に示された目標や内容を学校教育を通じて確実に達成することである。学習指導要領に書かれている最低限押さえなくてはならないポイントは、そう多くはない。学習指導要領を読み込み、単元の目標及び内容をしっかりと押さえることができれば、たくさんの工夫を織り交ぜた、教科で育むべき力が身に付く授業を行うことができると考える。「子どもを主語とした授業」とするためには、オーバーロードが生じている根本を見つめ直し、「教科書を教える授業」からの脱却が必要である。また、生徒指導提要には、「自己決定の場を提供する授業づくり」について、児童生徒が、授業場面で自らの意見を述べたり、観察・実験・調べ学習等において自己の仮説を検証し、レポートにまとめたりすることを通して、自ら考え、選択し、決定する力が育つこと、教員は、児童生徒の学びを促進する※ファシリテーターとしての役割を果たすことも重要であるとの記述がある。人生100年時代、激しい変化が止まることのない時代を生きる子どもたちにとって、生涯にわたって主体的に学び続け、自らの人生を舵取りする力を身に付けることは重要なことである。子どもの主体性や自主性を喚起し、自立した学習者を育むためには、待たないで「授業観」「教師観」をアップデートしていかなければならない。

昨年度より大鳥中学校区では、児童生徒が自分たちで学び取っていく授業とするために、これまでの一斉教授的な授業から脱却し、子どもたちが「自己選択」「自己決定」できる場面や機会を、一単位時間の授業の中に設定することに取り組んでいる。子どもたちが授業の中で自己決定するためには、課題意識や課題を解決する当事者意識をもたせることが重要であり、ひいてはそれが、子どもたちの主体的な学びにつながっていくとの考えに立ち、授業を行っている。

今年で創設100年となる福島県小学校長会が歴代脈々と築き上げてきた連携と協働という強みを活かし、各学校で取り組んでいる授業改革について情報を共有しながら、校長のリーダーシップのもと、「子どもを主語」にした授業改革にしっかりと取り組んでいきたい。

※ファシリテーターとは、授業や集団活動における議論や対話の際に、グループが共通の目的を理解し、協力し、目的を達成できるように支援する人のことをいう。

二つの手袋

福島市立渡利小学校校長 瀬戸 和子

凍てつく空気の2月のある日の出来事である。電車の発車のベルが鳴り始めた。ホームへの階段をかけ上げているとき、一人の男性が、私とすれ違う手間で手袋を片方落とした。「落ちましたよ。」と声をかけようか、一瞬の間に考えた。しかし、私はそれができなかった。階段を登り切ったところで下を見た。男性の姿はもうない。手袋は……。そこに落ちたままだった。

その年のお正月、父と初詣に出かけた。帰りの車の中で、父が手袋を片方落としたことに気づき、駐車場に戻ってくれと言い出した。その手袋は、以前私がプレゼントしたものであったが、そんなに高価なものでもない。駐車場に落としたかどうかはわからないのに戻っても仕方がないと父に伝えたが、父は戻ることを懇願した。駐車場に戻ると、入り口近くに落ちている父の手袋はすぐに見つかったが、すでに数台の車に踏まれたようだった。しかし父は、「よかった。お前が買ってくれたんだものなあ…。」そう言って、たいそう喜んだ。

電車の中で、二つの手袋のことを考えていた。あの男性は、今頃手袋を落としたことに気がつきがっかりしているのではないだろうか…。あの手袋が落ちたことを、私は知っていたのに。私だけが知っていたのに。

やり直したいこと

福島市立北沢又小学校校長 高橋 哲也

私には「あのときにもどってやり直したい」と思う出来事があります。

高校2年生の秋、野球部員だった私にとって、初の公式戦での打席が回ってきました。1点差で負けていた最終回、9回裏ツーアウト、ランナー1塁での代打でした。1塁ランナーを返せば同点の場面です。初球、相手の配球を読んでいた仲間の助言通り、外角に直球がきました。私は思い切りバットを振りましたが、一瞬の迷いがあったのでしょうか。当りはまあまあだったのですが、打球はライトスタンドに落ちていきました。この一球をとらえきれなかったことがすべてでした。結局は三振、試合終了です。だれも私を責める仲間はいませんでした。その後、部活引退まで公式戦の打席に立つことはありませんでした。

大学でも野球部に入り、そこでは主軸として試合に出ることもできました。でも、高校時代の後悔は晴れません。やり直しができないから人生は尊い、とは思いますが、「あのとき打てていれば…」と、今でも思います。そんなとき、聖光学院斎藤監督の講演で“前後裁断”という言葉を知りました。「過去(前)を悔やんだり未来(後)を憂いたりせず“今”を生きよ」という意味でした。これからの人生、“前後裁断”でいこうと思います。



会員相互の理解と連携

広報部長 福島市立瀬上小学校校長 丹治 達也

今年度も福島地区広報部は、「会員相互の理解と連携を深め、地区小学校長会活動を活発に推進すること」を目的にして、年2回の「広報福島」を発行する予定です。

今年度も「巻頭言」「新会員紹介」「特集(趣味・随想)」「専門部活動紹介」「特色ある学校経営」「方部だより」について、それぞれ会員の皆様に原稿の執筆をお願いしております。

「広報福島」を通して、それぞれの先生方の人となりを知ることができ、会員相互の理解と連携を深めることができたり、それぞれの学校、方部の活動を知り、それを自校で生かすことで地区小学校長会活動が活発になったりすると思われます。

今年度も紙媒体で配付することで、身近に置くことができ、それぞれの会員の時間がある時にじっくりと読んでいただくことで価値ある広報誌としていきたいと思っています。

今後データ化を進めていくにあたり、よりよい形、方法を模索していかなければならないと思っています。今後とも「広報福島」発行への会員の皆様のご協力をどうぞよろしくお願いいたします。



「一誠の子どもたち」と笑顔で 福島市立福島第一小学校長 穂積 浩

一日に数回、鏡で自分の顔を見る。最近、顔のしわがひどいと感じる。特に眉間から額のしわは、とても深く刻まれていて、自分でも驚く。これまで眉間にしわを寄せ、難しい顔をしてきたからだろうか。しかし、今更後悔しても遅い状況である。

私の学校経営の基本理念は、「学校が好き、友達や先生が好き、地域が好き」な児童の育成で、学級担任をしていた頃からこの思いは変わらない。全ての子どもが毎朝笑顔で登校し、友達や先生と楽しく学校生活を送り、「わからないことがわかった」と満足して帰る。そんな子どもの姿を見て保護者や地域も笑顔になる。これが私の目指す学校像である。そのためにはまず、毎朝、私自身が笑顔で「一誠の子どもたち」を迎えることが大切だと考えている。子どもたちや先生方の笑顔があふれる学校で、これからは目尻のしわを増やしていきたい。



学校っていいな 福島市立福島第二小学校長 車田 敦子

ある朝のことです。うれしそうに3年生が駆け寄ってきました。「大発見！さなぎがチョウになってたんだよ。」よほどうれしかったのでしょうか。教室では、まだランドセルを背負ったままの子どもたちが、羽化したチョウに目を輝かせていました。「早く先生に教えたいなあ。みんな来ないかなあ。」と言いながら、また何人かが廊下に駆け出していきました。「一人でもできる みんなとならもっとできる」 みんなが輝く学校でありたいと考えています。発見に目を輝かせ、大好きな先生や友達と一緒に喜びたいそんな姿がたまらなくうれしい時でした。そして今、子どもたちにその瞬間を見せたいと毎日さなぎを持ち帰る担任の先生の姿があります。学校っていいな。



教育の力 学校の力 福島市立福島第四小学校長 小林 雄

『みどりの春に さきがけて ほほえみかおる 梅の花』

古関裕而さん作曲の校歌「梅花はかおる」を全力で歌う子どもたちの姿に感動。

そして、子どもたちのまっすぐな眼に緊張しながら、4月7日、新しい気持ちの中、令和7年度のスタートを切る。気がつくと6月。振り返るとあつと言う間の2ヵ月だった気もする。子どもたちの笑顔と、その子どもたちに懸命に向き合う教職員の姿に包まれた学校はやっぱりいいなとつくづく感じる。

「いつの時代にあっても、またどんな社会にあっても、教育や学校のもつ力を信じている」

以前お世話になった尊敬する上司のことばを胸に、一日一日を大切に、子どもたち、教職員、保護者、そして地域と共に歩んでいきたい。



忘れられない言葉 福島市立南向台小学校長 冨田 貴俊

「生き物はたいへんだぞ」これは、私が大学卒業後に1年間勤務した企業を退社して、講師の仕事を始めたいと当時の上司に伝えた時に言われた言葉です。犬好きだったその上司が愛犬の世話になぞらえて言ったものと思われますが、この言葉を担任だった時分も管理職となつてからも何度も思い出すのです。私なりの解釈では「機械とは違い、思うようにはならない」「しっかり向き合わなければいけない」などと考えていたのですが、一番は「愛情をもって接する」ことなのかもしれません。古い書籍にはありますが、「子どもが育つ魔法の言葉」の中で、著者のドロシー・ロー・ノルト氏は、「ほめてあげれば子どもは明るい子に育つ」「認めてあげれば子どもは自分が好きになる」「見つめてあげれば子どもは頑張り屋になる」「励ましてあげれば子どもは自信をもつようになる」と言っています。校長としては、「子ども」の部分で「教職員」とも読み替え、どちらも育てていかねばと考えています。今後とも、ご指導のほど、よろしくお願いいたします。



「現状維持は衰退なり」を座右の銘として

福島市立杉妻小学校長 小松 信哉

杉妻小学校長を拝命して、早いもので約2か月が経とうとしています。初めて福島地区校長会の会員となりましたので分からないことが多々あります。諸先輩方に教えていただきながら早く慣れ、福島地区校長会のお役に立てるよう努力してまいります。4月に、「全国学力・学習状況調査」と「ふくしま学力調査」が実施されました。子どもたちの学力を的確に捉え「学校と家庭、地域が総ぐるみ」で「一人一人に応じた学力向上」を図ってまいりたいと考えております。子どもたちが、夢や希望を追い求め、生涯にわたって学び続けようとするためにも、やる気と本気に満ちた杉妻小学校の先生方と共に教育活動を展開し、改善サイクルを適宜回しながら、尊敬する上司から言われた「現状維持は衰退なり」の言葉を座右の銘とし、地歩を固めながら、邁進していく所存です。今後とも、ご指導よろしくお願いいたします。



着任のご挨拶

福島市立蓬萊小学校長 荒川 信一

校庭から望む吾妻連峰。雪うさぎが福島に戻ってきたことを実感させてくれます。蓬萊小学校は、教諭時代を含め二度目の赴任となります。校長室にある当時の卒業アルバムを引っ張り出しますと懐かしい子供たちの姿があります。当時の児童数は今の3倍ほど。にぎやかでした。そして、一緒に汗を流し苦楽を共にした同僚や導いてくださった先輩方。みんな若かった。思い起こしますと、当時の教員は、迷うことなく子どもと真正面から向き合っていたように思います。その後の十数年間に東日本大震災がありコロナ禍があり、時代とともに学校や教師をめぐる環境も随分と様変わりしました。しかし、子供たちの笑顔は以前と変わりません。その笑顔を絶やさぬよう精一杯励む覚悟です。私にとっての蓬萊小学校第2章が始まりました。どうぞ、これからもご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。



校歌に込められた願いを受けて

福島市立矢野目小学校長 田村 亮

本校の校歌では学校を「広場」に例え、歌詞として何度か「広場」が登場します。

その「広場」にはそれぞれに願いが込められています。

校歌1番に登場する「花咲く広場」これは（徳）を表し、自分や友達の尊さを互いに理解し、笑顔で協働する学校を意味しています。校歌2番に登場する「楽しい広場」これは（体）を表し、心も体も健康で、瞳を輝かせて楽しく生活できる学校を意味しています。校歌3番に登場する「希望の広場」これは（知）を表し、将来への夢と志をもち、地域で共に学びあう学校を意味しています。長年歌い継がれてきた校歌の願いを教員、保護者、地域の方々と連携し、学校が子どもたちの笑顔と歓声で満たされる「みんなの広場」となるように教育活動を行ってまいります。今後ともご指導・ご支援のほどよろしくお願いいたします。



まず人を渡せ

福島市立大笹生小学校長 邊見 まゆみ

「果物と笑顔あふれる 大笹生」という標語が、校内のあちこちに掲示されています。着任した4月には、学校周辺の果樹園には色とりどりのきれいな花が咲き、本当に心癒されました。

豊かな自然に囲まれ、四季の移ろいを肌で感じることもできる恵まれた環境の中、子ども達が毎日笑顔で過ごすことができるような学校経営をしていかなければ・・・と身の引き締まる思いを感じました。

校長職の責任の重さに不安が尽きない私の心の支えは、大学時代の恩師からいただいた「まず人を渡せ」という言葉です。「物事を始める時は、まず人の信頼や心を通わせることが大切」という意味があります。今後も、教職員や保護者・地域との信頼関係を築いていくことを一番にし、「自分は大切にされている」と実感できる学校、「明日も来たい」と思える学校づくりに尽力していきたいと思えます。ご指導どうぞよろしくお願いいたします。



自分でできることを

福島市立吉井田小学校長 下重 祐三

吉井田小学校に赴任が決まった時、「自分が吉井田小学校でやっていけるのだろうか、児童数が20倍にもなる学校で大丈夫だろうか」という不安が、頭の中を駆け巡りました。その時勤務していた喜多方市立熱塩小学校の教職員の数は10名、児童数25名の小規模校だったので、あまりにも差がありすぎる吉井田小が不安でたまりませんでした。

4月に吉井田小に赴任し、先生方と顔を合わせてみると、少し不安が薄れ、第1学期始業式や入学式で子ども達の顔を見ると、またさらに不安が薄れました。どこの学校に行っても、先生方は温かく迎え入れてくれるし、子ども達の元気な笑顔は変わらないんだと。歴代の校長先生と比べると、力不足でまだまだ駆け出しの自分ですが「自分には何ができるか、焦らず、できることに精一杯取り組んでいく。」と思います。福島地区校長会の皆様には、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



地域と共に育む、立子山の子どもたち

福島市立立子山小学校長 氏家 博行

この度、豊かな自然に囲まれ、地域に根ざした教育が息づく立子山小学校に赴任できましたこと、大変光栄に感じております。本校が位置する立子山は、国際的歴史学者である朝河貫一博士の生誕の地であります。博士は、この地の豊かな自然と地域の人々の温かさに生まれ、幼いころから深い探求心と広い視野を培われました。彼の「真理を探求し、国際的視野を持つ」という精神は、まさに現代の子どもたちに求められる資質であると感じます。地域が「学びのフィールド」となり、地域の人々が「学びの先生」となるような地域と共に子どもを育む教育活動を教職員全員で推進していきたいと考えております。福島地区での学校運営が始まり不安が大きい中ではありますが、地区校長会をはじめ南方部校長会の先輩方のご指導をいただきながら学校運営にしっかりと取り組んで参ります。どうぞよろしくお願い致します。



未知の世界

福島市立平野小学校長 片平 智幸

喜多方市立高郷小学校より、福島地区に来ました。全校生52名の学校から504名の学校への異動で子ども多さに日々奮闘の毎日です。登校時、保護者の方と泣きながら学校に来る子、給食を保健室で食べる子など、多様な子どもが多くいます。また、教職員の数も多く、先生方とコミュニケーションをとるのも一苦労です。戸惑いながらの学校運営を行っていますが、数多くの諸先輩の校長先生方から、福島地区の情報をやさしく教えていただいたり、学校の経営の仕方や保護者対応の仕方など具体的な例を挙げてアドバイスをいただいたりすることがあり、とても感謝しています。少しずつですが、自分らしさを出せるようになってきました。校長会での仕事も未知のものがたくさんあり不安がいっぱいですが、心強い校長先生たちと協力しながら、福島地区の力になっていけるように頑張っていきたいと思っています。



「お願いします」の言葉の重み

福島市立鳥川小学校長 永井 崇

毎朝、校門に立ち子どもたちとあいさつを交わす中に、保護者の方が自分の子どもの手を引いて登校してくる姿を見ます。「おはようございます。」と声をかけるとあいさつと同時に「お願いします」と言葉が返って来ます。これまでごく当たり前のやり取りのように感じていましたが、「お願いします」とは保護者の皆さんはどのような思いで言っているのか改めて自分自身で問い直すようになりました。自分なりに導き出した答えは、学校としての責任を果たすことでした。その責任とは生きる力を身に付けることや人と関わるができるようになること、そして、何よりも子どもたちが「楽しかった」という思いを持って下校することができることだと思っています。当たり前のことですが、子どもたちを取り巻く環境が複雑化・多様化する時代です。保護者からの「お願いします」を重く受け止め、何事にも危機感を持って学校運営に取り組みたいと思います。福島地区校長会の皆様には引き続きご教示をいただければと思います。よろしくお願い致します。



The school of the kids, by the kids, for the kids ～日々精進～

福島市立水保小学校長 渡邊 圭司

「水保小学校のみんなで気を付けていきたいことを放送します・・・」

放送委員会の児童による朝の放送のアナウンスで、水保小学校の一日が始まる。これは、代表委員が話し合っただけで決めた「月のATARIMAEチャレンジ」である。各委員会の委員長各1名と4年生以上の学級代表2名で構成された代表委員会が、月末に翌月の全校児童に関わる諸問題の解決を図るための話し合いをして、「月のATARIMAEチャレンジ」が決定する。因みに5月は、「トイレの後や給食前、体育や外遊びの後には、しっかり石鹸で手を洗いましょう。」と呼びかけていた。「みんなで声を掛け合って、気を付けて生活しましょう。」—アナウンスが終わり、朝の活動が始まる・・・。

水保小学校では、自分たちの生活をよりよくするための「月のATARIMAEチャレンジ」を児童の力で決め、全校生で実施しようとしている。大人に決められたことを守るだけではない、児童の自主的・実践的な活動が展開されている。VUCAな時代に生きる子どもたちの学校だからこそ、私が目指したい「児童の、児童による、児童のための学校」づくりに合致したこの取組だと考えている。これからもこの取組を応援しつつ、私自身も日々精進・・・である。



校歌とともに

福島市立飯野小学校長 佐藤 和仁

着任式で校歌を歌う子どもたちの、元気で誇らしげな表情に圧倒されました。

飯野小学校校歌は、「翼そろえて はるかな未来へ（作詞：鶴岡千代子 作曲：橋本祥路）」です。歌の途中に「飯野発 宇宙へ発信 それは愛！ 宇宙発 飯野へ発信 それは夢！」という語りが入ります。UFOの里飯野らしさがあふれる、ダイナミックで明るい校歌です。

本校校歌は、平成7年の新生飯野小学校開校を記念し制定されました。語り部分には、UFOの里というイメージの再現という意味と、21世紀は宇宙とのつながりが深まるであろうという意味が込められています。

この歌詞のように宇宙と未来に向かって夢を大きく広げていく子どもをはぐくんでいけるよう、学校経営に精進してまいります。福島地区の校長先生方のご指導、よろしくお願いいたします。



あおいのように

福島大学附属小学校副校長 青田 伸一

本校の校章のモチーフは、タチアオイです。6月初旬あたりから、校地内のいたるところで天に向かってぐんぐん伸びる茎や鮮やかな花びらを広げたあおいを見ることができます。縦にいくつもつuitつばみは、下から上に向かって順番に開花していくので、成長の花が日々開いていくかのようにも見えます。校章を中心に据えた校旗をたたえる歌の歌詞には、「あおいの茎（芽）（葉）のように」とあり、儀式的行事の際には掲げられた校旗と歌にふれ、あおいのように強く正しく、清く素直に、手と手をつなぎ進んでいく、このような人としても学ぶ姿勢としても大切に、子ども自身が培うことができるようにする学校であるという思いを、教職員一同その都度再認識しております。

同じ福島地区の子どもたちを預かり、教育する者として「我以外皆我師」の構えで精進してまいります。皆様、御指導のほどよろしくお願いいたします。

編集後記

広報福島第1号をお読みいただきありがとうございます。

ご執筆いただいた原稿を読むと、児童・教職員と向き合っ学校経営を推進する日々、温かい心をもつ校長先生の笑顔、心に沁みる貴重なご経験などが伝わってきます。『広報福島』は地区の校長先生のそんな姿をお届けしています。県小学校長会100周年。福島地区小学校長会を支えてきた歴代校長先生の思いも生き続けていると思います。原稿執筆等作成にご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

福島市立平石小学校長 栗城 敏彦